

《研究ノート》

# マルクス主義の形成における フランス社会主義の位置

——ブランキとマルクス主義——

小 川 登

1. 経済学主義, 哲学主義の害毒
2. マルクス主義の3源泉とフランス社会主義
3. フランス社会主義の系譜
4. マルクスの立場転換 (1843-1845年のパリ)
5. ブランキズムとマルクス主義
6. パリ・コミューンとレーニン主義 (プルードンとレーニン主義)
7. エンゲルスの誤った定式 (空想から科学へ)
8. 哲学主義, 経済学主義の揚棄 (マルクス主義政治学へ)
9. 参考文献

## 1. 経済学主義, 哲学主義の害毒

マルクス主義へと自己を接近させようとするとき, 人を, その理論と実践の両面においてつねに悩ませてきた一つの問題がある。自己をマルクス主義者へと形成させようとするとき, 人は, イデオロギー主義または科学主義のいずれかに力点をおいてその形成を考えざるをえないのがいまだ現状である。マルクス主義者への自己変革において, 人は, 哲学主義 (イデオロギー主義) か経済学主義 (科学主義), いずれかの偏向をおちいらずにはいられなかった。前者は主観主義的であり, 初期マルクスに愛着をもつ。

後者は客観主義的であり、後期マルクスに執着する。

だが、革命実践は直接には政治実践であることはあらためて考えてみるまでもないことであろう。とすれば、革命理論は媒介的には経済学と哲学に基礎をおいているにしても、その直接性においては無条件に政治学の領域にあるはずである。近代経済学にたいしてマルクス経済学があり、観念論にたいして唯物論があるように、なぜ近代政治学にたいしてマルクス主義政治学が確固として存在していないのであろうか。政治実践においていわゆる「政治主義」があり、政治学主義がないのはなぜか。これが初歩的な疑問である。確固たる政治学が存在しないことが、権謀術数、政治力学的な「政治主義」をつねに生み出してきたのではなかったか。

ところで、革命理論が哲学主義と経済学主義へと両極分解している傾向を突破しようとする努力はそれなりに存在してきた。陽極からは梯明秀氏の「経済学哲学」の樹立として、陰極からは「政治学の自立化」として丸山真男氏の近代政治学（政治過程論）があった。もちろん、その双方とも階級斗争の理論としては成功しているとはいえない。

そして、その政治学は、もっぱら政治思想史と政治史という分野にとどまり、「体系としての政治学」を確立させているわけではない。柴田高好氏の追求もいまだ政治学の方法論の次元にとどまる。丸山真男氏が、1947年に「マルクス主義体系の中では、経済学と同じような意味で『マルクス主義政治学』なるものを語ることは、少なくとも今日ではできない」<sup>1)</sup>と言ったときから今までに、どれほどの進歩が政治学原理論にあったと言えるであろうか。

他方、イデオロギー主義、科学主義という二つの害毒からのがれるため、それらより一步後退した地点からこの二つを止揚しようとする「思想主義」も生きながらえている。吉本隆明氏などがそうといってよいのだが、それは“理論とは魂のぬけた軀骸である”との弱者の発想、それにぬきがたい理論コンプレックスをその1特性としており、個の実感、情念の論理化に

はまりこみ、それ自体としては政治学なき今日、相当の意味をもっているにしても、さきの二つの偏向を超克する体系とはなっていないし、また、なりうるはずのものでもないであろうし、それは受けとり手（読者）それぞれに勝手きままな解釈をさせるものとしてある。

この「思想主義」は、政治学者・歴史学者の政治思想史研究ときわめて接近し密着する一面をもっていることは注目しておくべきである<sup>29</sup>。それにしても思想史がとりあげる歴史的人物はたんに研究者の好みにあう人であってよいのであろうか。

## 2. マルクス主義の3源泉とフランス社会主義

レーニンが、「ドイツの古典哲学、イギリスの古典経済学、フランスの革命的諸学説をむすびついたフランスの社会主義は、マルクス主義の三つの源泉であり、また同時に三つの構成部分である。」<sup>30</sup>とか、また「マルクスの学説は、哲学、経済学および社会主義の最も卓越した代表者たちの学説の直接的継承として発生した。」<sup>40</sup>と断言していることは、マルクス主義に自己をすこしでも近づけたことのある人ならば全部知っていることである。この命題の周知さにもかかわらず、この命題は検討されることが少なく、衆知があつめられているとはとうていいいがたいものとしてある。

おおまかに言って、ドイツの古典哲学はヘーゲルからフォイエルバッハを経てマルクスへという系譜で継承され、イギリスの古典経済学はスミスからリカードを経てマルクスへと継承された。この2源泉からの継承のプロセスは、それがいまだいかに問題点（未解明点）をのこしているとはいえ、詳細に明らかにされている。

だが、フランスの社会主義からの継承のプロセスは、最近、水田洋氏、坂本慶一氏が追跡をはじめている<sup>50</sup>とはいえ、いまだいっこうにはっきりしないままである。フランス社会主義の「最も卓越した代表者」とはいったい誰なのか、といったことすら明らかでないのである。

このことは何を意味しているのでしょうか。階級斗争の理論は、極端に図式化すれば、革命主体論＝哲学，打倒（革命）対象分析＝経済学，革命手段論（直接的政治実践の理論）＝社会主義という三つの分野によって構成されている。とすれば哲学と経済学は社会主義政治学へと集約されなければその意義を全うすることとはなりえないはずである。マルクス主義の生成におけるフランス社会主義の位置，継承のプロセスが明らかにされていないことは，マルクス主義の体系において直接的な革命実践の理論体系がすこしも明らかにされていないことになるのであった。政治理論＝フランス社会主義の位置・内容があいまいなまま放置されてきたことを一つの根拠にして，マルクス主義が哲学と経済学に両極分解をおこない，その政治実践が試行錯誤的なもの，「政治力学主義」<sup>6)</sup>的なものになっているのである。逆に政治学が体系化されない一つの根拠もそこにあると考えられる。

### 3. フランス社会主義の系譜

では，マルクス主義の生成過程において3源泉の一つを占めるフランス社会主義とはいったい何をさすのか。諸説があり，いまだ定説はない。だが，まあ数年まえ（1965年）までは，それはサン・シモン，フーリエ，そしてオーエンの空想的社会主義と等置されていた。有名な『空想より科学へ』のエンゲルスはいうまでもなく，レーニンもそう扱っているようだ。

しかし，通説のように三つの源泉の一つとしてのフランス社会主義を空想的社会主義と等置しておいてよいものであろうか<sup>7)</sup>。あと二つの源泉では，古典哲学＝ヘーゲル，古典経済学＝スミスと等置しうるし，ことは簡明である。だが，19世紀前半フランスの古典社会主義の出発点は，はじめから2つの潮流に分れていたのである。源流はルソーであるとしても，バブーフの共産主義とサン・シモン，フーリエの空想的社会主義とに分れて発展してきたのであった。

1 潮流は，1789年のフランス大革命の行動原理となったルソーの思想を

源流としたロベスピエールのジャコバン主義、その徹底化としてのバブーフの平等主義(ブォナロッチェの共産主義)、そしてその発展、物質化としてのブランキの革命論(階級斗争の戦術論)である。

もう一つの潮流は、おなじルソーを源流としたサン・シモン、フーリエの空想的社会主義、それを逆転的に発展させたプルードンの自由連合主義=無政府状態主義であった。マルクスは「プルードンのサン・シモンおよびフーリエにたいする関係は、フォイエルバッハのヘーゲルにたいする関係にほぼ等しい」<sup>9)</sup> といっている。だが、このヒントを日本の政治学、とくに理論政治学はどれほど検討してきたのであろうか。大勢は「アナキズムの元祖としてのプルードン」という位置づけだけではなかったのか。

ヴァイトリングのドイツ的原生社会主義は、マルクスによってその理論水準の高さを絶讃されたのであるが、この2潮流の影響のうえにあったものだといえる。

(1) バブーフ→ブランキ→マルクス

(2) サン・シモン、フーリエ→プルードン→マルクス

という2潮流のうち、前者が主流となって<sup>9)</sup>、フランス社会主義はマルクス主義の3源泉=3構成部分の一つになった。修正主義の始祖のベルンシュタインによれば「マルクス、エンゲルスは、たえずブランキ主義ないしバブーフ主義の精神のなかに生きてきた。」ということになる。「1847年には社会主義とはブルジョアの運動のことであり、共産主義とは労働者の運動のことであった。」<sup>10)</sup> のであり、労働者はサン・シモンやフーリエよりも、むしろロベスピエール、マラー、エベール、バブーフ、ブランキを模範としていた。

#### 4. マルクスの立場転換 (1843-1845年のパリ)

マルクスは、1843-1845年にブルジョア急進主義左派からプロレタリア共産主義へと転換する。思弁的哲学者から実践的共産主義者へと転換した

と表現してもよい。著作でいえば、いまだ人間解放一般の次元にいた『ユダヤ人問題』から「この解放の頭脳は哲学であり、その心臓はプロレタリアートである。哲学はプロレタリアートを止揚することなしには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現することなしには止揚されえない。」という有名なテーゼを末尾においた『ヘーゲル法哲学批判序説』、最終的には『ドイツ・イデオロギー』への大飛躍である。

1843-45年におけるマルクスのブルジョア急進左派からプロレタリア共産主義への大転換は、これまで事実として書かれるだけであって納得のいく説明がなされてこなかった。マルクスの思想形成史における盲点、死角がここにあると言っても決して言いすぎではない。この転換についてはほぼつぎのような説がある。

- (1) 大部分の論者の指摘は、この時期、マルクスがパリに在住して政治的先進国フランスの生々しい階級闘争に直接接触したことをあげている。階級闘争のなかにはパリの共産主義者との接触・対話もいれている。
- (2) 『ユダヤ人問題』から『ヘーゲル法哲学批判序説』への転換、すなわち人間解放の主体としてのプロレタリアートの発見は、マルクスの思想（ヘーゲル左派）の内的な自動展開として出てくるものである。
- (3) マルクスのこの転換はドイツのシュレーゲンの織布工の蜂起に直面したことにあるとする人もいる。著作としては『プロシア王と社会改革』にたいする批判的傍註」という論文を重視する。この論文には「すべての蜂起は例外なく、人間が共同的なあり方から、救いがたく孤立しているところで発生する」という周知の規定が分析されている。
- (4) エンゲルスの『国民経済学批判大綱』に接して哲学から「市民社会の解剖学」たる経済学に立ち向うことによって転換はおこった。この説は、1844年8月、パリでのエンゲルスとの初会見がマルクスをヘーゲル左派から共産主義へと転回させたとする。

これらはすべてマルクスの転換を説明するようにみえるが、これらだけではいまだ納得的でありえない。ただ(2)は、思想は思想として「単性生殖」するという自己展開力への観念的過信であるので問題にするにおよばない。人間の思想の転回は、転向もふくめて、きびしい現実直面するという要素がなければおこなわれぬものなのである。したがって、広松渉氏の主張（『マルクス主義の成立過程』至誠堂、1968年、5-6ページ）は、お話しにならないのである。パリでの共産主義者との接触、シュレージェンの反乱、エンゲルスとの出会の三つだけではどうもマルクスの立場のコペルニクス的転換には説明不十分である。十全でない。

パリの共産主義者との接触のなかで、マルクスは1970年現在、発掘・発見されているだけの研究、著作をおこなっていたのであろうか。「① 1842年から43年のあいだに、『ライン新聞』の主筆として、わたくしは、いわゆる物質的な利害関係に口をださないわけにはいかなくなって、はじめて困惑した。森林盗伐と土地所有の分割についてのライン州議会の討論、……モーゼル農民の状態について……の論争、最後に自由貿易と保護関税とにかんする議論、これらのものがわたくしの経済問題にたずさわる最初の動機となった。② 他方では、当時……フランスの社会主義や共産主義の淡い哲学色をおびた反響が『ライン新聞』のなかでもきかれるようになっていた。わたくしはこの未熟な思想にたいして反対を表現したが、だが同時にまた、……わたくしのこれまでの研究では、フランスのこれらの思想の内容そのものについてなんらの判断をくだす力のないことを率直にみとめた。」<sup>11)</sup>とマルクスは後年に言っている。①の前者は経済学批判として実現されたことはいうまでもない。では②の後者（フランス社会主義の研究と批判）はなされずにおわっているのか。すべてに根底的にかかわったマルクスがそれですましたのであろうか。1844-45年に、「すべての革命家はフランス大革命に帰る」ようにフランス大革命研究、それとブランキ研究（ブランキに関する草稿）を書いているという仮説が考えられるのであ

る。ブランキ研究のほうは、マルクスのパリ時代の研究成果のひとつとしての『聖家族』のうちの未発掘稿としてあるとも考えられる。マルクスのフランス大革命研究ノートとブランキ手稿は、パリのフランス国立図書館かアムステルダムの社会史国際研究所の奥に埃りにまみれてねむっているのかもしれない。

坂本慶一氏は「マルクスは、人づてか、または若干のパンフレットによってしか、ブランキの思想は知りえなかったはずである。」<sup>13)</sup> と言われているが、それはマルクス主義の生成史においてブランキ軽視、プルドン重視の坂本氏の速断というべきであろう。

フランス社会主義がマルクス主義の一つの源泉＝構成部分になったといっても、それは経済学や哲学の領域ではなく、その独自性はあくまでも階級斗争の戦術論（革命論そのもの）にあり、その革命戦術を論じ実践したのがフランス社会主義ではバブーフ——ブランキなのであるから、ブランキからの継承こそ問題とされねばならない。

## 5. ブランキズムとマルクス主義

マルクス、エンゲルスが直面したフランス社会主義とは、極端に言いければ、理論的にはプルドン、実践的にはブランキであったと言ってよい。『共産党宣言』の冒頭に出てくる「一つの妖怪がヨーロッパにあらわれている、——共産主義の妖怪が。」の共産主義とはいうまでもなくブランキズムのことである。

1843-45年にかぎらず、マルクス主義の階級斗争の戦術論（運動・組織論）の形成に実際に巨大な影響をあたえた1848年のフランス2月革命および1871年のパリ・コミューンを指導した政治勢力は、6割がたブランキスト、4割がたプルドン主義者であった。マルクスの階級斗争の学説、それは『フランスにおける階級闘争』、『ルイ・ボナパルト・ブリュメール18日』、『フランスの内乱』という政治的3部作をはじめ、いわゆる「時論集」



として存在しているが、その形成にとって決定的な位置を占めたのはブランキストの実践であった。政治革命よりも経済革命（産業民主主義）を重視し、暴力革命に強く反対したサン・シモン、フーリエ、プルードンの系列にマルクスの階級斗争論の源泉をみいだすことは不可能にちかいことであろう。

他方、ブランキズムは、マルクスの革命戦術論の核心のほぼすべてを主張し実践していたのである。革命の根拠をうちだした窮乏化革命説、革命の性格を説明した永続革命論、革命実現の手段としての暴力革命とプロレタリア独裁、革命組織としての秘密結社的前衛党観とその中央集権的組織論、さらに「大衆と指導者との関係＝自然発生性と目的意識性」論など<sup>13)</sup>、マルクスにとどまらずレーニンの革命論までもブランキは萌芽的にもっていたのである。

もちろん、ブランキは、日本のマルクス主義戦線では悪者であり、冷笑の対象でしかなかった。すくなくとも1959年まではそうであった。ブランキズムは、エンゲルスとレーニンの罵倒のみが強烈な印象となり、それは街頭における戦術極左・一揆主義と等置されるか、「少数精鋭の革命家集団の陰謀的革命」観という貧弱なものにされていたのである。ブランキズムは、実践的には1960年、理論的には1966年になってようやく少しずつ復権を認められるようになったが、いまだ大勢としては完全否定の存在である。ガローディは相当にくわしくブランキの思想全体を検討している<sup>14)</sup>が、やはりエンゲルス、レーニンの視角（全的否定）が色濃い。

だが、しかしマルクスのブランキにたいする評価はことになっている。マルクスはブランキを「バブーフ以後における最大の共産主義革命家であり、プロレタリア党の指導者であり」<sup>15)</sup>、とか「フランスのプロレタリア党の心臓と頭脳」<sup>16)</sup>とさえ賞讃しているのである。比喩的にいえば、リカードのアダム・スミスにたいする関係はブランキのバブーフにたいする関係にほぼ等しい、ともいえよう。

ブランキの思想と行動において絶望的反抗＝少数派革命＝一揆主義という側面、また、プロレタリア独裁を「パリだけの独裁」としていた認識がその歴史的限界としてあったことは事実ある。だが、その1側面にすぎない「革命の錬金術師」的傾向をもってブランキズム全体としてしまい、軽く一蹴しているかぎり、マルクス主義における階級斗争の戦術論＝政治革命論は、いつまでたっても無理論のいきあたりばったりのまま放置されるだけなのである。そして、マルクス主義の政治論は、国家(実体)論と党絶対主義、いわゆる「戦略・戦術の科学主義」の次元にとどまり、スターリン主義的政治をのりこえることもできないであろう。

## 6. パリ・コミューンとレーニン主義

(プルードンとレーニン主義)

さきに、「マルクス、エンゲルスが直面したフランス社会主義とは、理論的にはプルードン、実践的にはブランキであった」と位置づけた。

空想的社会主義をより徹底化させた面でのプルードン、『哲学の貧困』を生みだした『貧困の哲学』、「アナキズムの父」としてのプルードンについては、すでにおおく論じられているのでふれることもあるまい。いまプルードンが問題となるのは、1968年5月のフランス・ゼネストにかいまみられたサンジカリズム、そして1971年に100周年をむかえるパリ・コミューン(1871年)の「コミューン」論なのであり、的をしばれば「サンジカリズムの始祖」としてのプルードンである。

1870年9月に蜂起を間違いざた、時期尚早としたマルクスは、1871年4月には、プルードン主義者とブランキストとに指導されるパリの英雄的労働者を心底からたたえている。マルクスは、樹立されたパリ・コミューンのなかに「プロレタリア独裁」、「労働者国家」の原型をみだし、「労働の経済的解放をなしとげるための、歴史上ついに発見された政治形態であった。」とし、そして、コミューンのなかからマルクス主義国家・政治論の核

心として「コミュン型国家の4原則」を定式化したのであった<sup>17)</sup>。

- (1) 常備軍を廃止し、これを武装した人民（人民軍）にとりかえること、人民軍の中には位階制をしいてはならない。
- (2) 「コミュンは、議会的なおしゃべりの機関ではなくて、同時に執行府でもあり立法府でもある行動的な機関である。」
- (3) コミュンの議員、公務員、警察は普通選挙で選出され、選挙人に有責であり、きわめて簡単に解任（リコール）でき、また、短期に順番に交代されなければならない。「すべての人が順番に官吏になることによって官吏をなくする。」
- (4) 公務員（官吏）の賃金は熟練労働者の賃金以上であってはならない。

このコミュン型国家の4原則は、レーニンもいうように素朴な原始的民主主義（直接民主主義）を色濃くもっているが、労働者国家（プロレタリア民主主義＝プロレタリア独裁）の本質的属性なのである<sup>18)</sup>。

松田道雄氏も言うように「パリ・コミュンはたとえていえば、難波船にとりのこされた人間たちのあがきのようなものだ。パリという船が、普仏戦争によって横腹に穴があいたとき、船長だったティエールは、いちはやく救命ボートに高級船員をのせてヴェルサイユに避難してしまった。金をもっている連中もめいめい浮き袋をもって船からのがれてしまった。どこへもいきどころがなくなったあとに残されたのは労働者、小役人、“思想傾向のよくない” ジャーナリストと芸術家などである。この連中が船の沈むのをふせごうとして、一致協力して、こわれた穴をふせぐためにつくりだした機構がパリ・コミュンであった。」<sup>19)</sup> かもしれない。としても、歴史上はじめて労働者国家が樹立されたという意味は消えはしない。

ところでパリ・コミュンにはきわめて重大な問題点がはらまれている。というのは、マルクスの絶賛するパリ・コミュンの指導者たちのあいだには、マルクスが『哲学の貧困』（1846年）において口汚く罵倒したあわれなプチ・ブル主義者＝プルドン主義者の名をすくなくらず見出すことが

できるということである。マルクス・レーニン主義が「プロレタリア独裁の模範」として賞讃するパリ・コミューンにたいして、思想的に明白に影響をあたえたのがプルードン主義であることは、多くの論者の指適するところである<sup>20)</sup>。

マルクスにこっぴどくやられたプルードンの思想は、経済面においては相互主義、政治面では連合主義として要約しえ、一言でいえば「各人による各人の統治」=自己統治オートジエシオンにあることは周知のことである。経済面の相互主義（企業の自主管理）からはサンジカリズム、政治面の連合主義からはアナキズムが出てくるといえる。さきにあげた「コミューン型国家の4原則」に象徴されるパリ・コミューンは、マルクス・レーニンのベタボメにもかかわらず、「いかなる権力もごめんだ」という下層労働者の労働者主義（思想）の一つとしてのすべての権力否認=完全自治（自立，自主，自治）に色どられているものであった。

思想的にはプルードン主義によってパリ・コミューンは導かれたとするなら、マルクス、とくに前衛党を重視したレーニンがパリ・コミューンを全的に賞讃し、ロシア革命の模範にしたこととの間には決定的な断絶があることになる。権力否認の自己統治（労働者自治）の組織的表現であるコミューン（フランス）、ソヴェト（ロシア）、レーテ（ドイツ）、フンタ（スペイン）、工場評議会（イタリア）、ショップ・ステュアード（イギリス）、総じてソヴェトといわれるものと前衛党（共産党）とは、はたして同質的なものであるのかといった重大な疑問がでてこざるをえない。

パリ・コミューンの思想はプルードン主義（この場合、サンジカリズムをさす）であった、という意見には、ただちに「パリ・コミューンにはプルードン主義、ブランキスト、ジャコバン派がいたとしても、パリの大衆はこれらすべての指導者を革命の途中で軽く乗り越えて進んだのである。」という反論が準備されている。だが、この反論には自動的に「パリ・コミューンがある特定の思想体系にみちびかれていないで、労働者（職人）大衆

の自然発生性によってなしとげられたものであるとするならば、労働者大衆はその自然発生的な闘いのなかでプロレタリア独裁をつくりだすことができることの承認となる。であればマルクス主義、とくにレーニン主義の前衛党は必要でなくなるではないか。」という再反論がでてこざるをえないのである。

労働者（とくに初期的労働者、すなわち職人労働者。それは近代的大工場労働者とは異なる生活と意識をもっている）の仲間に現にある人間的なつながりがそのまま未来の社会の人間のつながりであることを牧歌的に信ずる労働者の楽天主義が、すべての権力否認のソヴェト主義（直接民主主義）を自然発生的につくりだしてきた。ロシア革命（1905年、1917年）におけるソヴェトが労働者の自然発生的斗争の産物であることを、トロツキー、とくにレーニンは全的に認めている。

以上のことを端的に表現すれば、ソヴェトと前衛党は同質的なものではなく、その本質において異質的な面を強くもっているということである。もっとつっこめば、前衛党絶対必要論のレーニン主義をそのまま、コミューン主義＝共同体主義＝自治主義＝共産主義と等置しうるのであるのか、という問題である。ロシア革命後、ソヴェトはボルシェヴィキ党によって解体させられていったこと<sup>21)</sup>をふくめて、党とソヴェト（コミューン）のあいだには微妙な異和感がつねにつきまといってきた<sup>22)</sup>ことに、きわめて重要な問題がひそんでいるようにおもわれてならない。ソヴェトの組織原理（自治）と前衛党の組織原理（指導）とが完全に調和的なものであり、矛盾のないものであると信じている現代前衛はもうあまりいないであろう。

プロレタリア独裁といっても、労働者自治のサンジカリズムと党が指導性をもったボルシェヴィズム（レーニン主義）とは同質であるとはいえない面を強くもつ。レーニン、トロツキーが、サンジカリズムのクロンシュタットの「ボルシェヴィキなきソヴェト」運動に血の弾圧をくわえ、サンジカリズム狩りをなぜおこなわざるをえなかったのか、ということは今に

いたるも強く問われているのである。

ボルシェヴィキとサンジカリズムとの根底的ちがいの一つは、労働者階級の自立能力・政治能力への評価のちがいに存在するのだが、この点からは、プルードンの『労働階級の政治能力』<sup>23)</sup>(1865年)がサンジカリズムの聖典として注目されなければならない。もちろん、労働者階級の自己統治能力を全的に認めるサンジカリズムは、同時に徹底した反インテリゲンチヤ主義(反知識人主義)であるわけで、それを知識人が最近再評価しだしているのがまず転倒しているのだという自己評価は忘れてはならない。反知識人主義のサンジカリズムへのアプローチは、また同時に、レーニンの知識人論(『何をなすべきか』1904年)が全面的にカウツキーの知識人論<sup>24)</sup>に依拠していることへの疑問を生まざるをえない。レーニン主義党の形成のバイブルである『何をなすべきか』で有名な「自然発生性と目的意識性」論は、目的意識性＝インテリゲンチヤ、自然発生性＝プロレタリアートと等置されて論じられているのであった。婦人解放運動の創始者・クララ・ツェトキンは「インテリゲンチヤ問題は結局、ブルジョア社会における精神労働および文化そのものの危機として現われる。」<sup>25)</sup>と規定しているが、マルクス主義知識人論の源流としてのカウツキーの知識人論を今あらためて俎上にのせねばならない時機にきている。

## 7. エンゲルスの誤った定式(空想から科学へ)

マルクス主義の生成、確立においてフランス社会主義のはたした役割を追跡していくにあたっての最大の障害は、エンゲルスの「マルクス主義は、唯物史観と剰余価値の理論という二大発見によって、空想的社会主義から科学的社会主義となった。」という有名な規定である。このことは、ロバート・オーエン、サン・シモン、フーリエの空想的社会主義を理論的に乗り越えるにあたっては、もちろん事実であった。

だが、問題なのは、エンゲルス、レーニンによって空想的社会主義がそ

のままフランス社会主義と同じものであるとされたため、階級斗争の諸学説および実践としてのフランス社会主義が、それ自体としての存在価値を失ったことである。すなわち、フランス社会主義は唯物史観（哲学）と剰余価値学説（経済学）によって乗り越えられたのであるから、要するに哲学と経済学の二つだけをやればよい、とされるにいたるのである。このエンゲルスの定式の実際的影響の巨大さは、「さて、フランス社会主義がいかなるいみでマルクスの思想的源泉のひとつであるかを追求するためには、あらかじめマルクス主義の本質を確認しておく必要がある。いうまでもなく、マルクスの思想体系は、エンゲルスによってマルクスの二大発見と称された、史的唯物論と剰余価値論とを基礎として構成されている。この二つこそはマルクス主義の不可欠・不可分の支柱であり、その思想的本質である。したがって、フランス社会主義がマルクス主義の思想的源泉であるというためには、それが、この二大基石の形成に何らかの役割を果たしたことを論証しなければならない。」<sup>26)</sup>という坂本慶一氏の説に見事にあらわれている。フランス社会主義へのこういう接近視座は、その豊かな文献学的な追求にもかかわらず石女になるであろうと思われる。政治学（フランス社会主義）を経済学と哲学に解消させては、フランス社会主義そのものの独自性は消失する以外にないからである。

水田洋氏のいうように、マルクス主義の3源泉の一つとしてのフランス社会主義において空想的社会主義は傍流であり、主軸はあくまでもバブーフ→ブォナロッチィ→ブランキ（およびプルードン）の革命的共産主義にあったとみなす視角が大切なのである。とするならば、フランス社会主義のマルクス主義への形成を現在的に追体験的再構成することを問題意識のラチ外にはおろさずようなことはできないはずである。ましてや、広松渉氏のように「最近の実証的研究が次第に明らかにしつつある通り、『源泉』の一つたるフランス社会主義はマルクス主義の成立過程においては殆んど直接的な影響を及ぼしておらず、初期のエンゲルスが繰り返し強調し

ている通り『ヘーゲル派の哲学を先へ先へと進めることによって（マルクスは）共産主義に達した』というのが実情である。<sup>27)</sup>と言ってすますわけにはいかない。広松氏の主張には二つの問題がふくまれている。「最近の実証的研究が次第に明らかにしつつある」とは広松氏の独断であり、もし「ある」のならばその実証的研究の文献を明示すべきである。モーゼス・ヘスとの関係だけを指摘するだけでは全く不十分である。第2には、エンゲルス再評価に熱心なあまり、広松氏はエンゲルスの言葉をうのみにしすぎである。マルクスがヘーゲル左派としての自己展開のうちに自動的に共産主義に到達した、とすること自体が哲学主義である。この哲学主義においては、エンゲルス重視の広松渉氏とエンゲルスぎらいの黒田寛一氏は奇妙にも一致する。黒田寛一氏は、ドイツ古典哲学の系譜からのみで『マルクス主義の形成の論理』<sup>28)</sup>を自己完結させたのであった。

ブランキの永続革命論、窮乏化革命論、武装蜂起組織による権力奪取、全人民の武装（既成国家の破壊論）との関係において、マルクスの政治革命思想と革命戦術・組織論の形成の過程を追跡しなければならない。もちろん、坂本慶一氏も言うように「この系譜（バブーフ、ブォナロッチィ、ブランキの革命的共産主義）の思想がマルクスのなかにどのような経路で、どのような形で摂取されているかを実証することは、それほど容易でない」<sup>29)</sup>であろう。とくに彼らがどこまでも「実践の人」であり「書斎の人」ではなかったため、文献学的<sup>30)</sup>な追跡は容易でないと予測される。したがって小稿は、単なる問題提起にすぎず、いまだ仮説の段階にもいたっていないのである。

そこで、レーニンはつねに「ただ階級斗争の承認をプロレタリアートの独裁の承認にまでおしひろめる人だけが、マルクス主義者である。」<sup>31)</sup>と踏絵的に断定して日和見主義との戦いをつづけたのであるが、このプロレタリア独裁というマルクス主義革命論の全核心とて、ブランキの提起と実践（1848, 1871年の両革命）なしにはありえなかったことだけは指摘しておこ



う。

ともあれ、このようにマルクス主義の源泉＝構成部分からフランス社会主義、とくにブランキズムは放逐されている。それを一つの大きな理論的根拠にして、変革理論におけるイデオロギー主義（哲学主義、観念的主意主義）と科学主義（経済学主義、即物的客観主義）という1個2重の関係（一つのものの二つの側面）にある偏向が、つねに存続しつづけていると思われる。前者は「生産力と生産関係の矛盾」説において無媒介的な生産関係（階級対立）主義となり、後者は日本のアカデミー・マルクス主義者の大部分がおかされている生産力説となっておりあらわれているのであった。アカデミー・マルクス主義が生産力（無階級）説におかされている状況は目をおおわしめるものがある。

#### 8. 哲学主義、経済学主義の揚棄（マルクス主義政治学へ）

日本において鋭角的な実践家と理論家のいきつく当然のなりゆきは、福本イズム（セクト的党至上主義）と山川イズム（巾広的大衆運動主義）の同時的アウフヘーベンへと目が向くということである。それは、マルクス主義の哲学と経済学への両極分解＝相互補完の理論状況を突破しようとする『マルクス主義政治学の樹立』への努力という強烈な問題意識を生みださずにはおかなかった。それは宇野弘蔵と初期マルクスの同時卒業への意志として日本では立ちあらわれるのであった。この同時卒業の言語に絶する困難さこそが、人をして吉本隆明または芸術への「旅立ち」を不可避にさせてもいたのであった。

『マルクス主義政治学の樹立』という自己意識を深化させようと孤独な営為をはじめたマルクス主義者は、私の知るかぎりではきわめて数すくない。柴田高好、特殊には梅本克己、埴谷雄高、水田洋氏ぐらいだろうと思われる。逆光線的に接近しているのがいうまでもなく卓越した近代政治学者の丸山真男氏である。しかし、氏らにおいては「マルクス主義政治学が

はじめて問題になったのは、グラムシにおいてであった。」という共通認識がある。マルクス主義の生成・確立におけるフランス社会主義＝政治学の位置を現在時点において再追跡するという苦難な作業が忘れられて、一種の流行として安易にグラムシやマキャベリに拠るのは、やはり知的怠慢のそしりをまぬがれないであろう。

マルクス主義の形成におよぼしたフランス社会主義の諸学説と実践の影響<sup>32)</sup>を歴史的、文献学的に事実にくわしく追跡して再構成していくことに、マルクス主義における哲学主義と経済学主義を同時的に揚棄する一つの道がさぐりだせるであろうし、それはまた、マルクス主義政治学の樹立への接近ともなろう。宇野弘蔵氏の「経済学における原理論といったものは政治学にはありえない。」<sup>33)</sup>といった経済学主義が、どれほどマルクス主義の世界史的全体性（マルクス主義の現在の有効性）をそこなっているかはかりしれないのである。

政治学もまた社会科学体系としてはつぎのような五つの分野をそのなかに構造として内包していなければならないであろう。

社会科学一般	経済学	政治学
① 方法論	経済学方法論	政治学方法論
② 原理論・原論	経済学原理論	政治学原理論
③ 学説史・思想史	経済学史・経済思想史	政治学史、政治思想史
④ 歴史	経済史	政治史
⑤ 応用理論、現状分析	経済政策論、日本経済論等	外交政策論、日本政治論等

理論体系としての政治学の構築には、最低つぎのようなことの追求が不可欠の作業であろう。まず、ルソーの財産論・国家論、ロベスピエールのジャコバン主義、バブーフ、ボナロッティの平等主義＝共産主義、Blanquiの革命戦術論という1潮流がある。つぎに、ルソーの自然状態論、サン・シモン、フーリエの空想的社会主義、プルードンのサンジカリズム、アナキズム、ヴァイトリングの原生的共産主義という第2の潮流がある。この2潮流を、個別研究、歴史上人物論<sup>34)</sup>という視点からではなく、マル

クス主義政治学への合流という視座から位置づけなおして再構築するという作業からはじめられるべきであろう。

小稿は、いまだ仮説というよりもたんなる問題提起の段階にとどまっている。そのあとの展開は私は、歴史学者、社会思想史研究者と政治学者、とくに政治学者によってなされるべきであるという説をもたざるをえない。経済学を専攻しており、フランス語が皆目わからない私には、いま数年をフランス政治史の研究にさくことが許されていないからである。

最後に、小稿をかくにあたって私が利用した主な文献を列挙しておきたい。フランス語文献は読めないのであげるわけにはいかない。

## 9. 参 考 文 献 (順不同)

### 著 書

- 〔1〕 水田 洋『マルクス主義入門』光文社 (カッパブックス), 1966年。
- 〔2〕 水田 洋・水田珠枝『社会主義思想史』東洋経済新報社, 1958年。
- 〔3〕 S. ムーア著, 城塚 登訳『三つの戦術』岩波書店, 1964年。
- 〔4〕 ガローディ著, 平田清明訳『近代フランス社会思想史』ミネルヴァ書房, 1958年。
- 〔5〕 坂本慶一『マルクス主義とユートピア』紀伊国書店 (紀伊国屋新書), 1970年。
- 〔6〕 平井 新『社会思想史研究』塙書房, 1960年。
- 〔7〕 対馬忠行『ブランキ主義とマルクス主義』弘文堂 (アテネ文庫), 1950年。
- 〔8〕 ブランキ著, 加藤晴康訳『革命論集』現代思潮社 (古典文庫), 上・1967年, 下・1968年。
- 〔9〕 プルードン著, 石川三四郎訳「労働階級の政治的能力」, 『世界大思想全集』春秋社, 1930年。
- 〔10〕 S. モリエ他著, 栗田 勇・浜田泰三訳『コンミュンの炬火』現代思潮社, 1963年。
- 〔11〕 リサガレー著, 喜安 朗・長部重康訳『パリ・コンミュン』現代思潮社, 上・1968年, 下・1969年。
- 〔12〕 淡 徳三郎『パリ・コンミュン史』法政大学出版局, 1968年。
- 〔13〕 H. ルフェーブル著, 河野健二・柴田朝子訳『パリ・コンミュン』岩波書店, 上・1967年, 下・1968年。
- 〔14〕 柴田三千雄『バブーフの陰謀』岩波書店, 1967年。
- 〔15〕 柴田高好『現代とマルクス主義政治学』現代思潮社, 1962年。

- 〔16〕 柴田高好『マルクス主義政治学序説』三一書房, 1964年。
- 〔17〕 ジュール・ヴァレーズ『パリ・コミューン』中央公論社 (世界の文学・第25巻), 1965年。
- 〔18〕 ジョルジュ・ブルジャン著, 上村正訳『パリ・コミューン』白水社 (文庫クセジュ), 1961年。
- 〔19〕 大仏次郎『パリ燃ゆ』上・下, 朝日新聞社, 1964年。

### 論 文

- 〔20〕 伊藤満智子「オーギュスト・ブランキと7月王制期の共和派運動」, 『歴史学研究』1970年8月号 (No. 363), 青木書店。
- 〔21〕 柴田朝子「19世紀フランスの革命思想 —— オーギュスト・ブランキを中心にして ——」, 岩間 徹編『変革期の社会』御茶の水書房, 1962年。
- 〔22〕 安曇裕志「革命運動史におけるブランキの再検討」, 雑誌『情況』1969年12月号。
- 〔23〕 加藤晴康「ブランキと武装蜂起」, 『現代の眼』1970年2月号

- 註
- 1) 丸山真男『増補版現代政治の思想と行動』未来社, 1964年, 560ページ。
  - 2) 丸山真男と吉本隆明における荻生徂徠論。
  - 3) レーニン『カール・マルクス』国民文庫版, 14-15ページ。
  - 4) レーニン, 同上書, 84-85ページ。
  - 5) 水田 洋『マルクス主義入門』光文社, 1966年。  
坂本慶一『マルクス主義とユートピア』紀伊国屋書店, 1970年。
  - 6) 「敵の敵は味方である」とか「奴は敵だ, 殺せ」といったもので代表される, 理想なき現実政治主義のこと。
  - 7) この点を鮮明にうちだしたのは永田洋氏であった。
  - 8) マルクス「哲学の貧困附録カール・マルクスの観たプルードン」1865年。
  - 9) 水田洋氏は前者を主流とみなしているが, ドイツ古典哲学, イギリス古典経済学, フランス革命的共産主義 (バブーフ, ブランキ), フランス空想的社会主義の四つをあげ, これを「マルクス主義の四つの源泉」としている。だがこの「四つの源泉説」の定式化にはにわかに賛成しがたい。なお, 坂本慶一氏は後者を主流とみなしている。両氏の説はいずれも前掲書を参照のこと。
  - 10) エンゲルス「共産党宣言への序文」, 『共産党宣言』岩波文庫版, 25ページ。
  - 11) マルクス『経済学批判』岩波文庫版, 12ページ。
  - 12) 坂本慶一, 前出書, 70ページ。
  - 13) ブランキ『革命論集』上・下 (加藤晴康訳), 現代思潮社を参照のこと。な

お、平井 新『社会思想史研究』塙書房、1960年が、ブランキの革命論を最もくわしく紹介している。(30-345ページ)ので参照してほしい。

- 14) ガローディ著『近代フランス社会思想史』(平田清明訳) ミネルヴァ書房、1958年刊、340-42ページ。
- 15) マルクス
- 16) マルクス、「ワトーへの手紙、1861年1月10日」、前出ガローディ本 340ページより重引。また、マルクスは2月革命期のブランキとその同志たちを「プロレタリア党の実際の指導者」とも言っている。(マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール18日」、『マルクス・エンゲルス全集』第8巻、114ページ)。
- 17) マルクス『フランスの内乱』、レーニン『国家と革命』を参照のこと。
- 18) この4原則の蹂躪は、労働者国家を官僚制国家へと変質させてしまうのである。
- 19) 現代日本思想大系第16巻『アナキズム』、松田道雄解説文、18-19ページ(筑摩書房、1963年)。
- 20) H. ルフェーヴル『パリ・コミューン』上・下 (河野健二・柴田朝子訳、岩波書店、1967年); 淡 徳三郎『パリ・コンミュン史』法政大学出版会、1968年等々。
- 21) 溪内 謙『ソヴェト政治史』勁草書房、1963年。
- 22) 最近の中国における文化大革命におけるコミューンと共産党の関係にもそれは見事にあらわれている。
- 23) フランスの20世初頭における労働運動のバイブルであり、1968年5月のゼネストにおいても一定の意味をもった、この『労働階級の政治能力』が、日本ではいまでもあまり注目されず、戦前にしか翻訳がなかったのはどうしてなのかを疑問に思う。今のところ、1930(昭和5)年、春秋社『世界大思想全集』第16巻に石川三四郎氏が翻訳したものがあるだけなのである。プルードンといえば、マルクスにほめられた『財産とは何か』(1840年)とマルクスにけなされた『貧困の哲学』(1846年)しか有名でないのが、そもそも日本の革命思想の貧困をものがたっているのである。
- 24) 向坂逸郎・鳥海篤助共訳『インテリゲンチャ』大衆公論社、1930(昭和5)年。レーニンが『何をなすべきか』で全面的に依拠したカウッキーの「インテリゲンチャ論」も私の知るかぎりでは、この戦前版にしか翻訳されていない。
- 25) 同上書、4ページ。
- 26) 坂本慶一、前出書、56ページ。この書は、文献的論証によってプルードン

とマルクスの相互関係の分析に新しいものを多くつけくわえているが、その接近視座が、エンゲルスのかの定式にとらわれており、それが致命的欠陥となっている。きわめて残念である。

- 27) 広松 渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂, 1968年, 5-6 ページ。
- 28) 黒田寛一『マルクス主義の形成の論理』こぶし書房, 1961年。
- 29) 坂本慶一, 前出書, 69ページ。
- 30) 文献学的証明をそのまま実証とするわが国の社会科学の風潮には疑問があることは当然である。
- 31) レーニン『国家と革命』岩波文庫版, 52ページ等々。
- 32) 「マルクス主義の形成にはたした フランス社会主義の位置」という設問自体が、「レーニンの『三つの源泉』という図式にとらわれている」(広松渉, 前出書, 5 ページ) のかもしれないが、レーニンのこの図式を打破するまでには、いまだフランス社会主義の研究はなされていないのであって、広松氏のように簡単に図式へのこだわりをすてるわけにはいかない。
- 33) 宇野弘蔵『経済政策論』、『資本論と社会主義』等を参照のこと。
- 34) ルソー、バブーフ、プルードンという個人研究自体は、日本でもここ10年間に大きく進んでいるのである。

(1970年10月2日脱稿)